

## 物語の本義 (二)

物語とは何か、ひきつづき考えてみたい。

前稿の末尾に、——現代人にとって「物語」はその全貌、本質、あるいは本義をとらえきれることは可能なのだろうか。そして、それは理解可能なのだろうか、疑わしい、ということとは自縄自縛なのだろうか——と問うた。現代人であるわれわれの思考というものに、もう少し懷疑心を抱いてよいのではないか、という異議申し立てのつもりであった。

現代人の考える、物語の読みかた、それに際しての合理性といったものに応える義務は、古代の作者にはない。ましてや、現代人の「文学」をめぐる諸概念の枠に、古代の作者たちの営為があてはまるものかどうかの前提すら考慮しないのであれば、それは後人の傲慢さのゆえか、あるいは

横 井 孝

は無知のなせるわざではない、と言い切れるのか。そういう異議申し立てのつもりであった。

もう少し別の角度から考えてみよう。

### 一 不特定多数のためには書かれない

物語は享受形態に依存する。

「どう書かれるか」よりも「どうして書かれるか」あるいは「誰のために書かれるか」の方が優先されるべき問題である。

その理由は簡単明瞭。物語は、印刷によって流布するよくなわけではなく、書写という手間をかけた、たった一部の書物による享受形態が読者を限定するからだ。しかも、

「紙」というものがとつもなく貴重で希少なものであったから、たつた一部だけ作られる物語は、誰が読むのかわからないという不特定多数のために書かれはしない。

「不特定多数のために書かれはしない」——言い換えれば「特定少数のために書かれる」ということがどういう現実なのか、多くの現代人、研究者たちには、どうもよく理解できないらしい。もちろん、研究者である以上、タテマエとしての知識、理解力は持ち合わせている（と信じた）。しかし、タテマエは考究の前提として存在するのではなく、研究者や学者となるための最低条件、もしくは存在証明みたいなもので、現代人としての彼らの思考を古代に振り向けるために、抑止力として規制するものでは、全くないらしい。だから、一千年前の読者が作者に限りなく近くに存する、しかも、近現代的な思考に対して何らかの持ち合わせもないということに対して、いとも軽々と無視して、「文学」などという、作者が聞いたことも見たこともないような概念を平気で短絡するのだ。

以下、長々とした引用——しかも、物語そのものでなく『蜻蛉日記』に関する論の一部になるが、物語に拘うための叙述の都合上、おつきあい願いたい。<sup>①</sup>

①……女性の世界とは、男性官人の立場からすれば次

のちがう私的世界を意味するものにはかならなかつた。……やがて男性に変わって女性によって物語文学が創作されるようになったとき——われわれは、いま源氏物語を念頭においている——、物語のそのような性質は過去のものとなって、創作が人間いかに生くべきかの問題にもつとも深く相結ぶものとなり、かつこの社会の本質と運命をも深いところで認識することができるものになった、という事実にまざまざとでくわすからなのである。そうした女性の物語を物語文学とよび、それ以前の男性のそれを古物語とよぶことによつて両者を区別することもできるであろう。

② 道綱母のかいた蜻蛉日記の序文によれば、世上に流布する古物語をちよいちよい読んでみると、ずいぶんありうべくもない詐りごとさえあるものだ。そんなものよりは変哲ないながらもわが身の上を日記にかいてみよう。そうしたならば、古物語などとはちがつて断然かわつたものができるであろう。この世の豪家名門の妻の生活がどんなものと関心をもつ人は参考にするがよい、というのだが、ここでわれわれが否応なしに驚かねばならないのは、要するに彼女における「一のあらたな文学的自覚」という点にほかならない。

③ すでにみたように道綱母をして身の上的日記をかか  
しめたものは一に古物語への反撥にほかならなかつ  
た。しかしそのような反撥は彼女個人の上にもふりか  
かった生活の苛烈さが、ただ物語とくらべてあまりに  
かけへだたるものだったがゆえではない。問題はもつ  
と彼女の主体のなかにあった。すなわち彼女によつて  
拒否された物語というものこそ、じつはほかならぬ彼  
女の夢や憧れの世界と一枚になって、彼女の魂の形成  
史に参与していたものであったという点はしつかりと  
おさえておきたいのだ。

①の「物語のそのような性質」とは、その前文にあった、  
「物語がいともしげなく貶められている」こと、それが律  
令国家の官人たちの教養となる経史詩文と「同日に論ずる  
ことさえてきぬ、非責任的な、私人的な瑣語にすぎぬ」と  
いう時代認識を踏まえての言である。その①の「創作が人  
間いかに生くべきかの問題にもっと深く相結ぶものとな  
り」などの言述は、この論が発表されたころの、敗戦とい  
う大きな「区切り」を経た、いかにも「時代」を感じさせ  
る言述と思わざるをえない。

①～③は、ひとつの論文のなかから抽出したものである

が、一九五四年の雑誌『文学』に発表されてすでに半世紀  
以上を閲しており、さすがに二〇一九年の現在からは古風  
に見える。もちろん人文学の分野では「ふるい」という評  
言が負の評と直結する訳ではないが、今日の研究風土ある  
いは読書環境のなかで、いかに対象が「文学」作品と看取  
されたにせよ、いまさら「人間いかに生くべきか」など、  
大仰で気恥ずかしく感ぜられる物言いではなかるうか。

現代の（あるいは稿者個人にすぎぬかも知れないが）醒  
めた目でみるならば、①「この社会の本質と運命をも深い  
ところで認識すること」、②「一のあらたな文学的自覚」、  
③「彼女個人の上にもふりかかった生活の苛烈さ」「魂の形  
成史」などという言辞は、作品や本文の緻密な検証のうえ  
でなければ簡単に指摘できることではないはずだ。さらに  
いえば、これも稿者の個人的見解に過ぎぬが、こうした言  
辞は、ある程度「時代」という流行や熱のうへにあつて、  
熱が冷めてみれば、気恥ずかしさだけが残るものだ。

もっとも、これらすべてが右の論者——秋山虔の言辞で  
はなく、②のカギ括弧の付せられた「一のあらたな文学的  
自覚」には注の番号があるように、他者の論の引用であつ  
た。右の論から遡ること三年余、西郷信綱『日本古代文学  
史』（一九五一年の初版）に、こうあつたのである。

さて作者は巻頭に、この日記の執筆意図をかたり、世のなかの古物語の類をよんでみると主に「そらごと」がかかれてあるけれど、自分はここでわが身の上の真実ありのままをぶちまけてみようという意味のことを前置きしているが、これは一のあらたな文学的自覚であった。『竹取物語』に代表される古物語……にぞくする作品の主題は、一人の美女を中心とする求婚譚であり、そこでは女性はいわば永遠の女性として非現実的に理想化され美化もされていた。……こうした伝統はずっとまで生きながらえてゆくのだけれど、『蜻蛉日記』作者がわが身の上になめたみじめな体験から、それが荒唐無稽なことであり、女性の現実に反したそらごととすぎぬことに不満をおぼえ、真実ありのままの自分をかたろうとしたのである。それはありのままの自分にたえ、自分を現実のなかでじっと凝視しようとする写実的精神の自覚であった。<sup>(3)</sup>

西郷の同書は、のちに改稿されて「同時代ライブラリー」「岩波現代文庫」など判型を換えつつ現在に至るまで版を重ねられているロングセラーである。古代前期から鎌倉初期までのごころな文学史として重宝され使われ続けており、その影響力も計り知れない。しかし、①〜③と、なん

と論調の似ていることか。「わが身の上になめたみじめな体験」「ありのままの自分にたえ(耐え?) 堪え?」「自分を現実のなかでじっと凝視」……。分析や検証ぬきの言述は、通史だから許されるものではあるのだろうが、情緒的とも評しうるこうした言述が許される「時代」であったのだ、と見るほかあるまい。

ただ、右の一節は、一二年のちに刊行された『日本古代文学史 改稿版』(一九六三年)では、書中全体にかなりな筆が入っているものの、論旨におおむね変更はないようだ。対応する箇所を、次に引いてみよう。

さて作者は巻頭に、世のなかの古物語の類をよんでみるとおもに「そらごと」がかかれてあるけれど、自分はこのわが「身の上」のことをぶちまけてみようという意味のことを前置きしている。これは文学上の新しい自覚である。当時の古物語には荒唐無稽な神仙譚や怪異譚のたぐいが多かった。古物語中の傑作である『竹取物語』にしても、一神女をめぐる求婚譚であり、男たちの失敗を痛快にすっぱぬきにしたものの、かぐや姫はいわば永遠の女性として天にのぼっていくのだから、やはりこの作者のいわゆる「そらごと」にぞくする。この「そらごと」には地上における一夫多

妻制が対応していた。作者はわが身の上になめたみじめな経験からそれを女の現実に反した絵空事だと見破り、ありのままの自分をかたろうとしたわけだ。とにかくここにはありのままの自分に耐え、自分を現実のなかで見つめようとする精神の目覚めがあった。<sup>(1)</sup>

改稿版はしがきには、

この「改稿版」は、旧著に手を入れたいわゆる修正版ではなく、新規に書きかえたものである。そして当然ここに旧著は放棄される。それも、勉強したところほど変貌し、怠けた部分がいささか旧態をとどめる仕儀になった。今後、勉強をせいぜい自分に課するほかない。

とある。「放棄」されたとはいえ、いったん書かれ流布したものは「当然」「放棄」することはできない。旧版・改稿版ともに共通するのは、作者が「そらごと」を真実ならざるものとして回避し、自分を「ありのまま」に見据え凝視しようとした、という見解であろう。そしてそれは旧版の「一のあらたな文学的自覚」が改稿版「文学上の新しい自覚」というものであり、「写実的精神の自覚」であり、「自

分を現実のなかで見つめようとする精神の目覚め」とことばを換えて評価するのである。これを承けた秋山論は「古物語への反撥」をとおして「彼女の魂の形成史」というものであったと置き換えていたことはすでに見てきた。

これらの言述は、西郷や秋山らの「あらたな」「新しい」「真実」「ありのまま」という基準や評価軸に沿うものを「蜻蛉」作者が目指した、あるいは目指そうとした、と認定したなかで見出したということだ。いうまでもなく、「蜻蛉」作者がそれらの言述に対して責任をとらなければならぬ謂われはない。そもそも、そのような「あらたな」「新しい」「真実」「ありのまま」を誰に向かつて書いたのか。「一般読者」などという不特定多数が存在しない時代なのである。彼らの日常生活の至近距離にあるような「日記」がありえようもない時代なのである。「誰のために書かれるか」が念頭にない論は、机上の空論に過ぎない。

## 二 読者を予想し、その人に披露する

前節に、物語ならぬ日記についての定説となっている見解を長々と紹介した。もう少しこだわってみよう。物語がどのようにして書かれるかという点をめぐって、重要な問題だと信ずるがゆえである。また、これは、稿者なりに幾

度かふれた問題点ではあるのだが、研究者たちは、一向に「現代」から抜け出ようとしない。現代の目で古代の物語を裁断したとしても、それは「現代人の共同幻想に過ぎない」と、かつて申し述べたところだが、世界の片隅でつぶやいたところで、誰も耳を貸そうとはしないらしい。<sup>5)</sup>

一九六二年、当時刊行されていた国文学の商業専門誌『国文学解釈と鑑賞』の、それこそ片隅のたった一頁の記事に、このような一節があつた。

……「だにあり」の部分に異論はないようであるが、私は不審とする。……（注―用例省略）……問題の箇所の大意は――世間に多い古物語などをのぞいて見ると、世間に多い嘘八百の話でもそうなのに、（これは）くだらない自分の身の上まで日記したもののなかから、よほど妙なものだろう、と言うのである。はなはだ工合の悪い事だが、古物語との対決とか、古物語の否定、それへの反撥といった、従来の定説は雲散霧消する。……真相は、近代人に都合のよいシエーマを、意味のよく取れない原文に押し付けた、という所である。<sup>6)</sup>

前節のような見解が出されて一〇年内。小さな小さな記

事の一節である。もとより稿者は管見ながら、この記事に注目した論を見かけたことがない。「あらたな」「新しい」「真実」「ありのまま」という西郷や秋山の論が自己の読解だけに依存しているのに対し、こちらは小さな記事ではあるものの、用例による分析を直指して、より「研究」の手続きをとっているのではないか。

それと雁行して、旧版角川文庫の「解説」に、次のような見解も表明されていた。

……世間にたくさん出まわっている古物語をちよつとのぞいて見ると、ありふれた作りごとだらけ、それすら、なじめぬ奇異感があるのに、取るに足りぬこんな身の上まで日記として書いて、なおのこと、類例なくとつつきにくいことでもあろう、の意であろう。古物語を引き合いに出して、それにも増す本日記の取つきにくさをいい、そのような形で読者に挨拶しているのであって、古物語を否定し、ここにこそ、まことを書いてみせると揚言しているのではない。<sup>7)</sup>

明記されているわけではないが、「ここにこそ、まことを書いてみせると揚言している」とは、まさしく前節の西郷や秋山の論を意識したものであろう。しかも、注目しな

ければならないのは、その後文である。

人にもあらぬ身の上まで日記して

とあり、「身の上をのみする日記」ともいう所から、述作の目的は自身の身の上を語るにあつたとわかる……そして、「天下の人の、品高きやと、問はむためにしにも（アナタハ）せよかし」というように、誰かに語りかけている。この述作は自身のためだけでなく、読者を予想し、その人に披露するつもりだったのである。……語りかけている相手は、作者の語る所に一々うなづき、共に喜び、共に悲しむような、同じ心の同性であろう。そのような人でなければ、語りかける道理がない。……本日記には、作者の半生にわたる生活経験を述べてあるから、それを読むに最もふさわしい人は、これから長い人生行路を歩いてゆくべき若い子女であろう。……「ためしにもせよかし」といつていゝる。どちらも効用が目的である。そうした目的を持つに至るには、作者自身の内部において、自身の過去の生活経験に何らかの意義を見出だし、文字を借りて形象化し、世に残しとどめておきたいという述作意識がはたらいたに違いあるまいが、その自目的は、効用という他目的と相関関係にあり、自目的がすべてであつ

たとは思えない。……述作者にとつて書くことが生きることであり、自身の救いであろう。しかしそれは道綱母に限つたことではなく、述作者一般について言えることで、その意味において、書くこと自体を目的にしているとのみ考える限り、それは単なる観念論になるのではないか。それにこの当時は述作は何らかの意味における効用をねらつてなされるものでもあつた。また、この作者が自身の苦悩に対処し、作品形成において生きる可能性を見出だして行つた、というようなものでもないだろう。

日記を執筆するにも動機がある。それも自己目的ではなく、他者に対する効用でなければならぬ。『蜻蛉日記』にしたところで、上中下三巻。相当数の紙が必要なのだ。『源氏物語』ともなれば、どれほどの紙を要することにならう（後に触れる）。そうした、当時としては貴重な資源を費やして、誰ともわからぬ対象におのれ自身の「一のあらたな文学的自覚」とやらの宣言をするものなのだろうか。不特定多数を対象にした近代以降とは、状況が全く異なるのだ。いまでは確固たる地位にある「古物語否定説」に対して、以前、こうした議論を俎上にのせた際、「古物語否定」否定説」と称したことがある。そのうえで、

ここで注目したのは、「述作は何らかの意味における効用をねらってなされるもの」という、「当時」への理解の姿勢なのである。この解説者（柿本獎）のいうところの、「自目的」を相対化する「他目的」こそが述作の重要課題だとすることは、一〇世紀の著作というものの物理的な条件や限界を考えた場合に、当然首肯されてよい見解ではなかったかと思うのである。にもかかわらず、こうした「古物語否定」「否定説」が研究史の片隅に押し込められてきたことはなぜなのか。あるいは、一九六〇年代なかば以降の若い世代には、「古物語否定」「否定説」が保守的、守旧的、回帰的に見えた。それが受け入れられなかった理由かも知れない。しかし、「新しい文学の創出」というような感性がいきいきとした息吹きを感じさせた時代とは、現在の研究情況は慎重に一線を画したい。<sup>(8)</sup>

と述べた。二〇世紀二一世紀の感覚そのままに古代に相應せしめるには、詳細な検証が必要なはずである。そうした手続きを無視した論は斯界に少なくないが、無知のなせるわざと酷評せざるをえない。大方には小論などは無視されるだろうけれども、角川文庫「解説」の一節を無視し続けてきた現状は、むしろ研究の退歩というべきであろう。文

庫が新版になったため、旧版が絶版となつて、解説ともども入手困難になったのも、無視の一因であろうか。

### 三 式部におほせられてつくらせられければ

さて、永らく物語がお留守になつてしまつた。以上を踏まえたうえで、物語の成り立ちに話頭をもどそう。

『源氏物語』には、紫式部がひとの依頼を受けて執筆した、という、名高い伝説がある。『石山寺縁起』『河海抄』『源氏大鏡』『源氏の物語のおこり』等に見えるもので、大斎院選子に新作の物語の依頼を受けた中宮彰子が紫式部に命じ、石山寺に参籠した式部が琵琶湖湖面に映る月明を見て起筆した、という内容の説話である。小異はあるものの、諸書はほぼ同様の内容になっている。『石山寺縁起』巻四所収のものが名高く、おそらくこの説話では典型ともいふべき例と思われる。

紫式部は、右大弁藤原為時朝臣が女、上東門院の女房にて侍りけるに、一条院の御伯母、選子内親王より、「めづらしからん物語や侍る」と女院へ申されたりけるを、式部におほせられてつくらせられければ、この事を祈り申さむとて、当寺に七ヶ日こもり侍けるに、湖の

た、はるぐと見渡されて、心すみて、さまざまの風情眼にさへぎり心にうかみけるを、とりあへぬ程にて料紙などの用意もなかりければ、大般若の料紙の内陣にありけるを、心の中に本尊に申しうけて、思ひあへぬ風情を書き続けける。彼の罪障懺悔のために、大般若を一部書いて奉納しける、今に当寺にあり、とぞ。この物語かきけるところをば、源氏の間と名づけて、その所変らずぞあるなる<sup>9)</sup>。

『石山寺縁起』は、洞院公賢（一二九一～一三六〇）と実弟の石山寺第一七代座主・益守とが制作にかかわったといわれ、その成立は正中年間（一三二四～一三二六）ともいわれる。

また、『河海抄』は『石山寺縁起』とほぼ雁行する時期に形成した注釈である。その巻一「料簡」に起筆伝説は、次のような形姿を見せる。

此物語の起に説々ありといへども、西宮左大臣安和二年太宰権帥に左遷せられ給しかば、藤式部おさなくよりなれたてまつりてなげく比、大斎院<sup>選子内親王村上天宮</sup>より上東門院へ、「めづらかなる草子や侍る」と尋申させ給に、「うつほ・竹とりやうの古物語はめなれたれば、あた

らしくつくり出してたてまつるべき」よし式部におほせたりければ、石山寺に通夜して、この事を祈申けるに、おりしも八月十五夜の月、湖水にうつりて、心のすみわたるまゝに物語の風情空にうかびけるを、わすれぬさきにとて仏前にありける大般若の料紙を本尊に申うけて、まづ須磨・明石の両巻をかきとゞめけり。是によりて、須磨の巻に「こよひは十五夜なりけりとおほしいで、」とは侍とかや。後に罪障懺悔のために、般若一部六百巻をみづからかきて奉納しけり。今にかの寺にありと云々。

前段の西宮左大臣・源高明のくだりを除き、他の内容はほぼ共通している。これら一四世紀前半の記録は残されているものの、それ以前に遡る史料は見あたらない。ただ『無名草子』源氏物語評の冒頭の一文、

さてもこの源氏作り出でたることこそ、思へど思へど、この世一つならずめづらかに覚ゆれ。誠に仏に申し請ひたりける験にやとこそ覚ゆれ<sup>10)</sup>。

とある傍線部「仏に申し請ひたりける験」がこの石山寺源氏起筆伝説を引いたものだったのではないかともいわれ

る。『源氏』の成立を論ずる解説には、ほぼ必ず引かれる一節ではありながら、解説者の多くは触れるか『縁起』等を引くのみで、「こういう伝説もある」と言及するのがせいぜいなどであった。観音靈驗説話の類型の一つではあり、伝説は所詮伝説、と暗黙の了解のもとに軽視（あるいは無視）されてきた。

しかしながら、これらの説話が、大齋院選子が中宮彰子のもとに「めづらしからん（めづらかなる）物語（草子）や侍る」という注文があり、彰子から「式部におほせられてつくらせられければ（式部におほせたりければ）」と執筆への動機付けがなされていることに注目したのである。前節の角川文庫解説（柿本獎）のいう「他目的」である。この話型は、後代にもひき継がれていて、江戸初期の『源氏の物語のおこり』の類にも強固に遺されている。実践女子大学文学資料研究所蔵『源氏のゆらい』には「世に古びたるはいかがせん。珍しからん一ふしを、式部、そこ（＝あなた）にともかくも、はからひてよ」と仰すれば……」とある。起筆伝説のあらかたが、このような外発的な執筆要請に端緒を有するという形で軌を一にしているのである。実際に大齋院からの働きかけがあつたか否かは、ここでは議論しない。注目しなければならぬ問題から逸れるからである。伝説が伝説であるがゆえに黙殺されてきた

ことは、こうした実名ないしデテールに違和感を持つ向きによつてなされてきたことであろう。

もう一点、伝説類に注目すべき点がある。——『縁起』料紙などの用意もなかりければ、大般若の料紙の内陣にありけるを、心の中に本尊に申しうけて、『河海』『仏前にありける大般若の料紙を本尊に申うけて』、『源氏のゆらい』『仏前の般若（＝大般若経）の裏をひるがへし』と、必ず『源氏』執筆に要する料紙の記載があることである。物語にせよ日記にせよ、紙に書かれなければならないという、ごくごくあたりまえ過ぎることの前提が抜け落ちると、論は觀念化してしまふ。紫式部は『源氏物語』全部あるいは一部の料紙をどのようにして調達したのだろうか。

日本史の側から倉本一宏が次のような指摘と提言をおこなっている。物語を文字として定着させるための紙を取りあげた点で、傾聴すべきところがある。

……『源氏物語』を書き記すためには、いったいどれほどの紙が必要となるのであろうか。

一枚の紙を四半本として四丁とすると、一丁は表裏で二頁となるから、一紙から八頁が取れる。現存最善本の写本とされている大島本を見た限りで大まかな平均を取り、乱暴な仮定を行うと、一行に二〇字書くと

して、一頁十行とすると、一頁には二〇〇字、つまりは一紙で一六〇〇字を書くことができることになる(藤本孝一氏のご教示による)。

『源氏物語』は全編五十四巻で九四万三一一三五字である。これを記すためには六一七枚の料紙が必要となる。内訳は、「桐壺」巻から「藤裏葉」巻までの第一部が四三万九四六五字で二九一枚、「若菜上」巻から「幻」巻までの第二部が一九万三八五一字で一二五枚、「匂兵部卿」巻から「夢浮橋」巻までの第三部が三〇万九八一九字で二〇一枚である。

もちろん、これは清書用の料紙の問題であり、下書き用の紙や、書き損じて反故にした紙は、膨大な量にのぼるはずである。表紙や裏表紙用の紙も勘定に入っていない。また、これは一紙一六〇〇字で計算してみた枚数だが、一紙を袋綴にして四〇〇字を書いた場合には、二三五五枚という、気の遠くなるような料紙が必要となってくる。……

いったい中級官人の未亡人にして貧乏学者の女である紫式部に、これほどの料紙が入手し得たものであろうか。下書き用には為時の使い古しの反故紙の紙背を使用したにしても、まさか清書用にはそうはいくまい。いずれかから大量の料紙を提供され、そこに『源氏

物語』を書き記すことを依頼されたとするならば、その可能性がもつとも高いのは、道長を描いては他にあまりない。『源氏物語』という物語は、はじめから道長に執筆を依頼され、料紙の提供を受けて起筆したものであるという可能性を、ここに提示してみたい。

歴史学からのこうした問いかけに対して、国文学の立場からどう応えるべきなのであろうか。『源氏物語』が「はじめから道長に執筆を依頼され」ていたとするならば、起筆の時期は石山寺の伝承が説くように出仕以後なのか、あるいはそれ以前の里居時代からなのか、あるいは「はじめから」をいったん視野の外におくとして、道長の依頼を清書本と比定すべきなのかどうか、『源氏』の成立事情に絡んで多くの疑問が生じることは間違いない。しかし、物理的な要因として、右のごとく膨大な料紙が必要であるという事実は変えようがない。従来の『源氏』研究はこうした問題を軽視し、なおざりにしていたと言わざるをえない。

#### 四 誰のために書かれるか

そもそも諸家は『源氏物語』の執筆事情をどのように説いていたか。いくつかの叙述を並べてみよう。

(a) ……長い未婚時代に習作的な物語を作っていたらうとは想像できなくはない。しかしそれを現在の『源氏物語』と解することは行き過ぎであろう。……夫の死後は物語をさかんに作っていたことはたしかで、はじめころには習作的なものもあつただろうが、まもなく『源氏物語』が書き始められたと見てよい……。

この執筆の心理的動機については……将来に希望のない未亡人の日々をつれづれを紛らすところにあつたと思われる。……単なる読書人や博識家にとどまり得ないで、みずから物語の創作に赴いた理由は、よしんば少女未婚時代からの習作の経験を考えるところでも、根本的には式部の生命力が、夫の死を機として凍結の危機にさらされることによつて、猛然とそれを拒み、彼女をして積極的にみずから生きようと決意し、それを実行させたところにこそ在るのではなからうか。<sup>13)</sup>

(b) ……長保五年(一〇〇三)五月十五日、左大臣道長歌合がその私邸京極殿で催された。「三十講の折に、歌よむ人々を召して、三つの題……といふことをよませ給ふ」(十卷本歌合)……この催しを父から聞いた紫式部は、歌そのものには特別の興味を持たなかつたが、

和歌を作る男性歌人が同時に漢詩文を作る文人であるという、何でもない事実には、ふと興味を持った。……物語という虚構の世界の中なら、漢詩文を応用しても、抵抗は少ないのじゃないかしらと思ひ至つた時、式部の物語創作の方法の一つは確定した。

……書く方の式部自身も、せっかく、夫を失つた傷心をまぎらわすための絶好の作業と考えて取りかかつた創作が、数日で完成してしまつたのでは面白くない。どうせ、他人に読んでもらうことは二の次で、自分の楽しみで書くのだから、一帖一帖細部を書きこんで完成して行くことにするの、一つの方法である。……<sup>14)</sup>

(c) ……いろいろな不運・不幸の果てに、乳呑子を抱えて突然夫に先立たれて、何の希望ももてなくなつた時、今までもましてどうしてこんなことになるのかを考へるようになって、日々のわが身、わが一族の日々の生き方の拙さから、人間の心——反省とか覚悟とか決意とかの精神の構えが、いかに頼りなく動揺するものかを、じつと観察・分析するようになったのでしょうか。こうしている中で、本来、この人の身の内に眠っていたらしい強靱な思考力が、むくむくと頭をあげて動きはじめたのでしよう、いささか理屈っぽい、骨つ

ばい性格が物を言いはじめたようです。

……〔紫式部日記〕の記事によつて）……宣孝の死後の一二年間は、紫式部は、ただ茫然自失の状態で、将来への見通しもなく過ごしていたのですが、やがて、読むだけでなく、小さな物語でしょうが、作ることも始めたかに見えます。そういう作業の中で、どうやら平静な精神状態に戻つたと言つていいことになりません。日記には、「源氏の物語」が帝や中宮の御前にあるとか、人々に頼んで書写する記事などがありますから、『源氏物語』を書き始めた時期も、この寛弘二年末以前なのであらうと考えられています。しかし、宮仕以前に、どのくらいの分量が書き上げられていたのかはわかりません。<sup>(15)</sup>

『紫式部日記』には『源氏物語』に関わる記事が五箇所もあるけれども、起筆や執筆の事情についての確実な資料があるわけではないので、いきおい記述は抽象的にならざるをえない。(b)のように大胆な推測を交えるのでなければ、(a)や(c)のように観念的にならざるをえない。特に(a)は、一九六六年に旧版が出され、一九八五年には新装版が出され、さらに著作集に収められ、しかもいまだに読み継がれているロングセラーの一節。これまでの影響力は小さく

かつたはずである。そこにある記述「式部の生命力が……凍結の危機にさらされる」とか、「猛然とそれを拒み、彼女をして積極的にみずから生きようと決意し」など、とにかく分析的ではなく情緒的なのである。それも、一九五〇年代初頭に書かれた「彼女の夢や憧れの世界と一枚になつて、彼女の魂の形成史に参与していた」とか、「ありのままの自分に耐え、自分を現実のなかで見つめようとする」とかいうような、どこかで見た文体で。

紙という媒体を使った述作はすべて特定少数のための「他目的」があつた。「自目的」があつたとしても、「他目的」に付随するものでなければならぬ——という論こそ、現代人の感想文である観念論や抽象論を超えて、より確かな手応えを感じさせる。観念論は、いくら言葉を重ねても、大仰な身ぶりを交えたとしても、空疎というほかない。

「述作すべて」というのであれば、『蜻蛉日記』のような「日記」はもとより、『源氏物語』のような「物語」もまた「他目的」があつたということになる。その一見解として、廣田收の次の論を見てみよう。

……本稿の目的はただひとつ、『源氏物語』の初期形の本文がどのようなものであつたかについての議論はさて置き、何よりもまず、『源氏物語』は中宮のため

に献上されたものであり、中宮付き女房であった紫式部が、帝王学ならぬ中宮学を中宮に進講申し上げることを意図して描かれているのではないかという仮説を提示する事である。

ただ、そのようなことを言い出すには前提がある。まず、紫式部が出仕前に『源氏物語』の一部（もしくはその前段階である習作の物語）を、すでに書いていた可能性―成立論の問題も存するが、結局のところ、長編化に伴う物語の制作は、出仕以後の問題と捉えることが妥当であろう。それには何よりも、紫式部が藤原道長の要請に従って、一条天皇の中宮彰子のもとに出仕したことを言わなければならない。道長が長保元（九九九）年に入内させた彰子はわずか十二歳であった。とすれば、……『源氏物語』が中宮彰子に「身代わりの恋の物語」として、ストーリーの面白さを中心に読まれたと理解しても別段構わない。ただ、中宮彰子の成長、成熟に応じて、この物語が複雑で深く仕掛けられた物語であると理解されることを期したものと考えたい。

（傍点、廣田）

廣田の論は多岐にわたるが、右の一節で主旨はほぼ尽きている。『紫式部日記』に見える中宮への楽府進講が、胎

教を通しての儒教的治世の実現では必ずしもなかったこと、『源氏物語』のなかでは「后」と「中宮」の語の使い分けが「帝」と「内裏」のそれに対応していること、藤壺の宮が模範たるべき中宮として描かれていること、一方では「事の忌み」と称しながら『源氏物語』のなかでは長恨歌や王昭君の故事を引いていること等々。いずれも「中宮」に対する教育的配慮が背景にある、と指摘するのである。従って、

紫式部が彰子中宮に『源氏物語』を献じたとき、中宮彰子は中宮の役割を辿りながら『源氏物語』を読もうとしたのではないかと思われる。

と本論を閉じるのである。前節に引いた倉本一宏の提示した「可能性」が思い起こされるはずだし、『源氏物語』に「教訓の書」を見出そうとした清水好子の見解を思い合わせるはずである。もっとも、清水のそれは、

父の道長は娘の女性開眼を必死になって企画したにちがいない。したがって、その教育は人間としての全般的な教養というよりは、いちじるしく帝に愛されるためのもの、男を目当てとしたものであったと思われる

る。<sup>(15)</sup>

というもので、中宮としての理想像を目指す体系的体系を見出そうとする廣田取に対して、やや矮小な印象がある。

ともかく、すべての述作に「外的要請」があり、「他目的」によって成り立つとすれば、『源氏物語』が内発的な啓示によって書かれたとする通説に対して、一石を投ずるものになる。くり返しになるが、「すべての述作」には「物語」も当然含まれている。自己の満足のためよりも、「誰のために書かれるか」こそが問題の核心部分ではなかるか。

いま、ここで倉本・廣田・清水に対峙するには、稿者は準備不足というほかない。ただ、現在のところ、前引の廣田の提案の冒頭に「『源氏物語』の初期形の本文がどのようなものであったかについての議論はさて置き」とあるその一点が気になるのである。前節に倉本一宏説の問題点を挙げたが、廣田説も同様といわざるをえない。常日頃、より『源氏物語』の「本文」を追究してゆきたい立場の人間には、紫式部が「中宮学」を目指したころの『源氏物語』が「初期形の本文」とどのような関係にあるのか——それらとの関係を座視できない。それを「さて措」いたところでの議論には、やや偏頗を感じざるをえない立場なのであ

る。

たしかに「誰のために書かれるか」の議論と本文に関わる議論とは相性がよろしくないかも知れない。いたずらに問題を複雑化させることにもなりかねない。しかし、現代的な感性で単純化したところに「物語とは何か」を解く秘鑰があるとは思えない。当の廣田がこうも言っていたのである。

特に『源氏物語』研究では（おそらく無意識に）近代的な枠組みでもって、作者と作品という立て方で論じることが、今もお拭い難い状況に感じられる。<sup>(16)</sup>

——と。また、別の文脈ではあるが、隣の畑からも、次のような忠告がなされていることをここに付加しておこう。

現在は「不特定多数の人がよむ」ことを考えて書いていることが多い。しかし、過去において、つねにそうであったわけではもちろんない。それもおさえておく必要がある。「書く」ということは「よむ」ということと表裏一体であることは原理的にはそうであるが、「想定されている誰かを読むことができる」ということと「不特定多数の誰でもよむことができる」という

注

こととはずいぶん違う。「可読性」が保証されていないければ、「書く」言語の文字化」が意義を失うことは疑いないが、その「可読性の保証」も一律ではないことには注意しなければならない<sup>19)</sup>。

- (1) 秋山虔「古物語から源氏物語へ——その道程の二面的な素描」(『文学』第二卷二号、一九五四年二月)より、①六〜八頁、②八頁、③二頁よりそれぞれ引抄した。
- (2) 秋山は、注(1)論の一年前「古代(後期)」(『日本文学思潮』矢島書店、一九五三年六月刊、所収)において、すでに「道綱母が苦難にみちた我が身の上」に相通わぬものとして、はなから物語を拒否した態度」(二〇九頁)といていた。注(1)論の先駆をなす。見逃されそうな論ゆえ、あえて注記しておく。
- (3) 西郷信綱『日本古代文学史』(岩波全書149、岩波書店、一九五二年一〇月刊)、一六五〜一六六頁。
- (4) 西郷信綱『日本古代文学史 改稿版』(岩波全書一九六三年四月刊、のち『西郷信綱著作集 第七卷(文学史と文学理論Ⅱ/日本古代文学史)』平凡社、二〇一一年四月刊)。ここでは著作集一四三〜一四四頁から引用した。
- (5) ましてや、活字本(それもほぼ九割以上が小学館・新編日本古典文学全集)という名の「現代」に依存する現状では、「古代」に根ざすことなど思いも寄らぬだろう。以下、横井「物語から日記へ、日記から物語へ——物語史の一風景」(『源氏物語の風景』武蔵野書院、二〇一三年五月刊、第五篇第一章)に述べたことにも触れるが、あえてここではくり返しておきたい。
- (6) 石田稷二「蜻蛉日記の序——加美津考(五)」(『国文学解釈と鑑賞』第二七卷一、一九六二年一月)二〇八〜二〇九頁。
- (7) 柿本奨「蜻蛉日記」(角川文庫、一九六七年一一刊)「解説」。以下の引用は三三六〜三三九頁。
- (8) 横井、前掲注(5)論、「源氏物語の風景」第五篇第一章「物語から日記へ、日記から物語へ——物語史の一風景」より、五八四頁。
- (9) 小松茂実編『石山寺縁起絵巻』(日本絵巻大成18、中央公論社、一九七八年七月刊)、一三六頁。
- (10) 富倉徳次郎「無名草子評解」(有精堂、一九五四年九月刊)。
- (11) 上野英子「文芸資料研究所蔵『源氏のゆらい』解題・影印・翻刻(調査報告91)」(実践女子大学文芸資料研究所『年報』第二八号、二〇〇九年三月)。
- (12) 倉本一宏『紫式部と平安の都』(吉川弘文館、二〇一四

年一〇月刊)

- (13) 今井源衛『紫式部』(人物叢書・吉川弘文館、一九六六年三月刊)のち、『今井源衛著作集3 紫式部の生涯』(笠間書院、二〇〇三年七月刊)所収。著作集六三〜六四頁。
- (14) 稲賀敬二『源氏の作者 紫式部』(日本の作家12、新典社、一九八二年一月刊)、一〇九〜一一一/一一三〜一一四頁。
- (15) 阿部秋生『源氏物語』入門』(岩波セミナーブックス41、岩波書店、一九九二年九月刊)、三三三/三三六頁。
- (16) 廣田收『源氏物語』は誰のために書かれたか——中宮学に向けて』(同志社大学『人文学』第一九六号、二〇一五年一月)、のち『古代物語としての源氏物語』(武蔵野書院、二〇一八年八月刊)所収、一三頁。
- (17) 清水好子『源氏の女君(増補版)』(塙新書7・塙書房、一九六七年六月刊)、七四頁。
- (18) 廣田収、前掲注(16)著、二八頁。
- (19) 今野真二『正書法のない日本語』(岩波書店、二〇一三年四月刊)、七三頁。

(よこい たかし・実践女子大学教授)